

館長就任の挨拶

大和文華館館長 水田 徹^{あきら}

水田 徹 館長

館長職をお引き受けして3か月、朝日に輝く赤松の樹間に蛙股池の緑の水面を見渡しては、大和文華館の歴史を振り返り、館の将来を慮る毎日が続きました。ようやく館の日常活動のおよその輪郭が見えてきたところでもあり、自己紹介を兼ねつつ、館の運営の基本について思うところを申し述べ、着任のご挨拶と致します。

もう40年も前になりますが、大学の研究室で吉川逸治前館長から美術史という学問の楽しさと厳しさを初めて教わりました。楽しさは生来好きだった美術をじっくり味わい、作者の意図や歴史の流れに思いを馳せること、厳しさとはしかし、作品を正確に見ることの難しさでした。

特に見ることの難しさは、その後留学したウィーン大学美術考古学科でもいやというほど思い知らされました。演習の時間にギリシャ彫刻の実物大の石膏を前にその形を頭のとっぺんから足先まで逐一細かく説明させられるわけですが、幾度やっても「おまえにはそれだけしか見えないのか」と繰り返されるばかり。とうとう最後に「おまえの目が確かかどうか触ってみなさい!」とおっしゃって、教授は私の袖を引っ張り石膏の肌を手を当てさせるのです。驚きました。緩やかな丸味の彫りと見えたところに、微妙なアンデューレーションが施されていたのです。「作者の思いはそんな単純なものではないぞ!」教授の言葉が今でも耳にこびり付いています。

同じことを先年アテネの美術館でも経験しました。共同研究者になってくれた学芸員の特別の計らいで彫刻にそっと触らせてくれたのです。豊かに波打つ着衣の襷がことのほか美しい女性像でしたが、その衣の裾の裏側に手を入れてみろというのです。

「あっ、裏側も彫ってある!」

「もっとよく触れ!」

本当に驚きました。裏側の彫りはただ単に波打っているだけではなく、衣の表面の波形を忠実になぞってあったのです。作者の手の中にあったのは大理石という無機物ではなく、風に揺れさえもする、生きた布地だったのです。

美術史という学問、ひいては美術を見るということは、作品の中に作者の生きざまを見定め、美術を通して人類の歴史に学ぶことを最終目的とします。しかしそれは、いわゆる歴史資料が先にあって、その資料通りに美術を解釈することでは決してありません。もしそうなら美術史、あるいはは見るという行為は歴史の挿絵に過ぎなくなります。そうではなくて、ちょうど歴史学が古文書を第一次資料とするように、我々はまず自分の目で作品をよく見、かつ考えることを出発点にするべきです。むろんそれだけに我々には作品を詳細に観察し、その色や形の掘ってきたる所以を正しく理解する責任が生じます。仮に見方が不正確であったり、作者の意図から外れていたなら、その上に再現される歴史もまた真実から離れてしまうに

違いないということに、我々は常に心しておく必要があります。

いや美術品の見方は色々あって、見る人の個性も尊重されるべきだ、というお考えもおありでしょう。基本的には私も同感です。ただ先に触れたギリシャ彫刻の場合もそうであったように、作者の制作態度は真剣そのものです。一時の思いつきや印象まかせに鑿を振るっていたとは到底思われません。従ってそれを見る我々も作者と同じように真摯に、食い入らんばかりに作品と対峙する必要があります。そして作者と同じ地平に立ち、作者と視線があったとき、我々は真に作品を見たといえるのではないのでしょうか。その瞬間に見えたものこそ、作者の真意であり、そこにこそ我々は歴史の真実を読みとるべきではないでしょうか。

矢代幸雄、石澤正男、吉川逸治の3先生が築いてこられた大和文華館の伝統を受け継ぎ、その上に新たな歴史を積み重ねることは、容易なこととは思われません。慌てず、焦らず、奇をてらわず、館一丸となって日々研鑽を重ね、研究者や専攻の学生さんにとっては大和文華館が見ることと思案することの道場となるよう、一般の方々にとっては己の美意識を磨き、明日の生活に知恵と勇気を加味していただく基地となるよう、そして小・中学生や高校生には、侵しがたい、しかし何やら深遠な未知の世界の体験の場となるよう、館員ともども努力して参る所存です。友の会会員の皆様をはじめ、奈良を愛し、美術に親しんで止まぬ皆様の、ご支援とご鞭撻を心からお願ひ申しあげる次第です。

吉川前館長・水田館長歓迎会



季刊 美のたより No.128

平成11年 8月19日

発行 大和文華館